

---

# 時給 7 0 0 円の鬼狩者

岡村 としあき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

時給700円の鬼狩者

### 【Nコード】

N0243BA

### 【作者名】

岡村 としあき

### 【あらすじ】

両親の離婚により、一人母方の祖母が経営するボロアパートで生活する事になった桃山 ナイト15歳。かつこいい名前と裏腹にへタレ気質でエロバカい少年だが、彼には秘められた力が？ 犬神輝鈴。猿願寺 いちご。木地 雫。犬、猿、雉の三人の美少女を引き連れ、現代の鬼退治がここ尾二河市で幕を開ける。

## プロローグ

レジの女の子がカワイイ。志望理由としてはこれ以上ない。時給は安い。県の最低賃金だ。けれど、客の入りは少ないからきつとヒマだろう。結論……応募する！

履歴書と、今日の晩御飯の食材を入れた買い物カゴを右手に抱えて、桃山ナイトはそう決心した。

午後7時のスーパー。半額セールで殺気だった主婦を押しわけ、どのレジに並ぶか一瞬躊躇する。1番から5番までのレジがあり、そのうち2と3と5が空いていた。

2番のレジには、高校生のアルバイトらしき女の子がぼーっと天井を見上げながら、自分の髪の毛の端を指先で弄んでいた。1000点満点である。勤務態度には難点がありそうだが、ビジュアルに関しては1000点だ。

肩甲骨あたりまで伸びた黒髪は、前髪以外のサイドの部分は編み込まれており、特徴的な髪型だった。そして、前髪の下は日本人形を連想させる色白の美しい顔である。彼女を包む、ピンク色の胸元にリボンの付いた可愛いスーパールの制服は、大きなお友達に売りつければ高値で取引されること、間違いなしであろう。

そして、その制服の胸元の名札には『犬神 輝鈴』と書かれている。近寄って見ると、制服の黒いプリーツスカートは丈が短い。40センチくらいだろうか？ そこから生え出た瑞々しい健康的な白い太もも……思わずかぶりつきたくなるナイトであった。

「ええですなあ……」

ナイトは鼻を伸ばしつつ、次のターゲットへと視点変更した。

3番のレジには、こちらも高校生くらいの女の子がニコニコと愛想のいい笑顔で立っていた。またまた100点満点である。茶色に染まったサイドテールの髪は、腰の位置まで伸びている。その髪を束ねているアクセサリは、ヒマワリのような黄色い花で、彼女のイメージにぴったりと一致している。太陽のような愛くるしい笑顔。そして、なんといつても彼女の胸に実った大きな二つの果実である。制服のリボンを押し上げ、これでもか！ といわんばかりの巨乳ちやんであった。

その豊かな双丘の上の名札には『猿願寺 いちご』と書かれている。

「最近の女子高生はけしからん……けど……ええですなあ……」

おっさんの様な感想を述べたナイトは、最後に5番のレジを見た。

こちらもまた100点満点である。一瞬、中学生かと思間違える。いや、ランドセルを背負っても違和感がない。だが、ここでアルバイトをしている以上は、自分と同じ高校生なのだろう。勤務中にもかかわらず携帯をいじっている当たり、仕事をナメている、世の中ナメている、許せん。けれど、かわいい。だから許す。俺が許す。ナイトは心の中でそう呟くと、彼女の姿を眺めた。赤い髪は三つ編みにして、胸の当たりで揺れている。頭の上にちょこんと乗っかった黒いカチューシャ。清楚と可愛らしさが融合した、ザ・ロリキアラ店員であった。

制服の名札には『木地 雫』と書かれている。

「ええですなあ……」

さて、だ。この3つのレジから一つを選ばねばならない。これ即ち、どのルートに進むか、という事でもある。ギャルゲーという選択肢と同義だ。ここから一人のヒロインを選ばなければならない。ナイトは考えた。ひたすらに考えた。

どのレジに進むか、どの娘を攻略するか。

「よし、決めた！」

意を決し、一歩前に出る。目指すはあのレジ……！ 足に力を込めて駆け出す。その時だった。

「あんだ、邪魔よ」

肥えたブルドッグのような中年の女性が横から追い抜いて、ナイトをそのポリユーマーなお尻で弾き飛ばした。それをきっかけに、他の主婦達がナイトをカートで突き飛ばしたり、買い物カゴで殴ったり、健康サンダルで蹴ったりした。

そして、気が付けば2番も3番も5番も全て塞がっていて、入れ代わりに1番が空いた所だった。

どうやら、この選択肢はタイマー制だったらしい。仕方なく1番のレジに並ぶとナイトは後悔した。

「いらっしゃいませえ、おきゃくたま」

特徴的な顔の女性店員だった。点数で言えば……測定不可である。彼女からは強大な気を感じる。レジのバイトよりも、外人部隊の傭兵とか、伝説の殺し屋とか、悪の秘密結社の怪人をやったほうが適材適所な気がする。見開いた目がホラー映画のワンシーンだ。半開きの口は太陽系外からやって来たんじゃないかとナイトを警戒させる。筋肉だか、授乳器官だかわからない巨大な胸部のそれにくっついてる名札には『忌琉山 出栖子』と書かれている。きるやまですこ？ 芸名だろうか？

しかも、バーコードを読み取る手がものすごく遅い。ようやく全てを通し終わり代金を支払うと、お釣りをむんずとつかんで、血走った瞳でナイトの手を生暖かく包み込み、にたあと笑って、『ありがとうございまちた』と言った。ノコギリみたいな歯を覗かせていつそ『ヒヤハハハ！ ブッ殺してやるぜクソガキ！』とか言っていた方がしっくりくる顔だ。ていうか、絶対こいつ人殺してる。ナイトはそう思った。

レジを抜け出し、買い物かごを窓側の台の上に置くと、ナイトは背後に殺気にも似た気配をびんびんと感じながら、ビニール袋に買ったばかりの商品を入れていく。

「はあ。俺の高校生活……いきなりバッドエンドかよ……」

レジに振り向くと、閉店が近いのだろう。ナイトが清算している間に客の姿はほとんどなくなっており、気が付けば客はナイトただ一人であった。

不意に3つの視線を感じた。しかし、それは一瞬の事で、閉店処理に皆いそいそと取り組んでいる。ナイトはなんだか気まずくなっ

て、そそくさと逃げるようにスーパーを後にした。

## 俺の最終奥義は自殺行為！

白い長袖のＴシャツとジーンズに身を包み、閉店間際のスーパーから、一人の少年が出てきた。ナイトである。

桃山 ナイトは平凡な高校生の少年である。非凡なのは、ナイトという名前くらいだろうか。やたらとかっこいいこの名前だが、本人はヘタレで逃げ足が速い。

そのため、中学生の時についたアダ名はチキンナイトという、なんとも不名誉な称号であった。当然、彼女もいない。髪も、クセ毛があつてぼさぼさである。だが、それなりに素材はいいらしい。

ナイトは、いまだ慣れない道を歩いて新しい我が家へと向かう。季節は春。4月7日。明日から高校1年生になる。

つい先月、両親が離婚した。父親と母親。そのどちらと暮らすか。しかしナイトも今年で16歳。自分の考えをしっかりと伝える年齢だ。両親はどちらについてくるか……その選択をナイトに委ねた。

ナイトが下した決断は、どちらとも一緒に暮らさないことだった。母方の祖母の家に厄介になるとというのが正式な答えになる。両親以外の肉親が祖母ただ一人だったというだけで、ナイトはおばあちゃん子なワケではない。むしろ、苦手である。

祖母の家に越してきて一週間……そのため、祖母の実家近くの高校に入学する事になった。なにもかもが初めて……というわけでもないが、一年に一度来るか来ないかの土地に、ナイトはまだ慣れていない。



祖母によくお菓子をねだった地元の古いスーパーへの道のりも、幼い頃の記憶を手繰り寄せながらようやくたどり着いたのだった。

バイトもしなければならぬ。いくら祖母の家に厄介になると言っても、最低限自分の小遣いと多少の生活費は稼がねばならない。それが、自分から両親と離れて暮らす決断をした責任であるとも思っている。

それに、祖母の家はあまりに貧乏だ。小遣いをねだるうものなら殴られる。ママチャリを時速100キロで飛ばす祖母は、『ママチャリデユラハン』とか呼ばれて、近所の皆さんに恐れられている。運転中に激しく頭を動かすので顔が見えなくなるらしい。

さらに、地元のヤクザ数人を病院送りにした伝説もあるとか、ないとか。逆らわない方が身のためである。

「かわいかったなあ……レジの女の子達……」

アルバイト求人のを両手で広げ、スーパーの袋を左手に持ち、ナイトは回想する。『レジ担当募集！ あなたの笑顔を待っています。スーパーユメヒコ』そうでっかく広告されている。ナイトが左手に下げているスーパーの袋にも、スーパーユメヒコと印刷されていた。

現場の視察と、履歴書の購入と、晩飯の買出しと、散歩。一石四鳥であった。いや、レジの美少女達をこの目に焼き付けられた……それも含めると一石五鳥であろうか。

「でも、時給700円って……安すぎ」

一番の懸念事項は時給の安さだろう。まあ、こんな片田舎のスーパーなのだ。これで妥当なのかもしれない。

「とにかく、あそこで決定だな。今日中に履歴書書いて、明日面接の電話入れとくか」

そう呟いて前を見た時。ピンク色の何かが目の前を横切って行く。頼りない街灯が地面を僅かに照らす中、白い生足が鮮やかな残像となって、ナイトの網膜に焼きつく。

「2番の子だ……」

それはナイトの記憶が確かなら、2番レジにいた『犬神 輝鈴』という少女だ。バイト帰りなのか、服装は先ほど見た制服のまま……あの姿で帰るのは、ある意味サーブスだ。素直に嬉しい。ついでに、優しい春風が下からビュンビュン吹いてくれたらもつと嬉しい。この位置取りなら見える……かもしれない。

しかし、風が吹くことも無ければ、ナイトに気が付くこともない。少女は悠然とその場を去っていく。ナイトもその場を去ろうとした時。ふと、それが目に映った。

「なんだありや……？」

2メートルはあろうかという、白い布に包まれた棒状の物体を左手に持ち、少女はすでに暗闇が支配する児童公園へと入っていった。スーパーの制服のまま。

何事かと思つて、ナイトも公園へと駆け込む。そして、その光景に絶句した。

ジャングルジムやら、ブランコ。シーソーや砂場がある至って普通の公園で、少女が3人の若い男に囲まれていた。友達同士といった空気ではない。明らかに不穏な空気だ。

ジャングルジムを背に、男達は今にも少女に襲い掛からんとしている。少女がこれから受けるであろう恥辱を、ナイトは容易に想像する事ができた。

このままでは少女が危ない。

今こそ、俺の桃山流暗殺拳最終奥義『ファイナルフラッシュ』が火を吹くときか！？ と、ナイトは拳に血をたぎらせズボンのベルトに手を掛けた。

しかし、ファイナルフラッシュは捨て身の技である。脱いだズボンを身代わりにし、敵があっけに取られている間に逃走するといふもので、これを実行すればナイトは大切なものを何か失う。

故に最終奥義なのだ。

ナイトは意を決すると、最終安全装置という名のベルトのピンを外して、気を高めるポーズを取った。端から見れば、この空間で一番怪しいのはこの少年だろう。

しかし、何かがどさりと崩れ落ちる音がして視線を再び少女達に戻す。

少女が刀を振りぬき、男達を横へ一薙ぎする瞬間であった。

「キヤあああああああああああああああ！」

ナイトは、女の子みたいな可愛らしい悲鳴を上げて尻餅を付いた。

少女の足元には、白い布が落ちている。あの棒状の物体はバカ長い刀だったらしい。

あの女は何だ？ あの刀、本物？ オレ、殺される？

様々な疑問が渦となって、ナイトの頭の中をかき乱す。

「見たのか……」

少女は無表情のまま、ナイトに一步一步近寄る。表情のない、キレイな顔。それは人形そのもののようにだ。

ナイトはフルフルと首を一生懸命360度回転させる。360度では、一回転しているのだが、当のナイトはそれくらいパニック状態であった。今なら、どんな胡散臭い契約書にも印鑑を押すし、幸運のパワーストーンも50個くらい大人買いする。

少女は、すっと刀をナイトに向ける。

殺される。

まだ、彼女もいないのに。

まだ、魔法少女りりかるもえかの最終回も見っていないのに。

まだ、昨日ネットで買ったギャルゲー『放課後うはうはパニック』も届いていないのに、祖母にみつかったら一生笑いのタネにされる。

ナイトの頭の中を色々な妄想や願望が駆け巡った。

そういえば、小さい頃に親友のトレカを一枚パクってずっと黙ってたまだ。まだ謝ってもいない。しゅうちゃん、ごめんよ。

ナイトは幼い頃の悪行に心の奥で手を合わせ、謝っておいた。

「そこを動かすなよ」

## 心を鬼にして

ナイトは、一瞬ダメかと思った。

突然、ドサリと音がして何かが隣に転がった。おそろおそろ目を開けると、目の前には背中を向けた少女がいる。痛みは、どこにもない。

斬られた痕も、血しぶきも無い。ナイトはそこに来てようやく気が付いた。隣に転がっている中年の男に。彼女が切ったのはナイトではなく、この男だったのだ。

「な、なんだよ、これ！？ お、おい、救急車！ 早くしないとこの人達、死んじゃうぞ！」

「必要ない」

少女は素っ気無い。

「鬼だ！ お前、鬼だ！」

ナイトは少女を指差し、わあわあと喚く。

少女は見下すかのように、視線をナイトに向ける。

「鬼はこいつらだ。自分は、狩りをしたにすぎん」

と、少女がそっぴい終わるか終わらないかの間に、ナイトの横で先ほど斬られた中年の男が起き上がった。

「え？ あれ、生きてる？」

中年の男は、どこにも傷がない。確かに斬られたはずなのに、ぴんぴんとしている。それどころか、紫色の瞳をぱちくりさせて、口からよだれを垂らした。体全体から黒い蒸気がもやもやと噴出しており、それが頭から靴のつま先まで包み込んでいる。

ハアハアと荒い息を吐いて、男は少女を求めて歩み出る。

「なるほど。手加減は必要ないか。……そのほうがこちらも助かる」

少女は中年の男に振り返り、刀の柄に右手を添え、抜刀の体勢に移った。だがしかしそれよりも、中年男が距離を詰める方が早い。

少女の強気だった顔が一瞬歪んだ。

危ないと思った刹那。爆竹が破裂するような音がして、男は膝から崩れ落ちた。

「きりりん、油断しすぎい。いちごちゃんがアシ入れなかったら、精肉コーナー行きよ？」

「……猿願寺か、余計な事を」

いつの間にか公園のジャングルジムの上に、別の少女が座っていた。

「3番レジの子……？」

公園の外灯に照らされ、少女の顔がはっきりとナイトにも見えた。サイドテールの髪と、太陽のような愛くるしい笑顔……確かこの子は『猿願寺 いちご』……。3番レジの少女は、ジャングルジムの上でライフルのような物を構え、備え付けられたスコープを覗き込んでいた。

「いちごちゃんはサイキョーだからね。アシも完璧に入れちゃうよ……って、その男の子誰？」

「知らん。いつの間にか現場にいた。どうしたらいい？ 消すか？」

2番レジの少女は刀の柄に右手を添えて、ナイトに振り向く。

「きりりん、また結界張り忘れたの？ あゝめんどくちやーい。しょうがないなあ……しーちゃんに頼んで記憶消してもらおう？」

3番レジの少女はジャングルジムからジャンプした。かなりの跳躍力である。3メートル以上は飛んでいる。帽子をかぶったキノコが大好きなヒゲのおじさんでも、あんなに飛ばない。

ナイトがマヌケな顔で夜空に視線をさまよわせると、制服のスカートの下と一瞬目が合った。いや、目というより、苺の柄とだが。

「へえ、けっこうかわいいい。でも、この辺の子じゃないよねえ？」

3番レジの少女はナイトの目の前で着地すると、ナイトに息がかかる距離まで顔を近づけて、覗き込んだ。唇と唇が触れ合う。と思ったら、Tシャツの首首を両手でつかまれ、赤ん坊を高い高いするかのよう持ち上げられた。



「今見た事……しゃべったら、殺すよ？」

太陽のような笑顔で、3番レジの少女はナイトを脅す。一体、この少女の細腕のどこにこんな力があるのか。視界は頭一つ分高くなっている。

視線を下にやると、3番レジの少女と目が合う。

「まあ、しゃべった所で誰も信じないしい。ムダな事なんだけどね。それに君の記憶、消しちゃうし」

何も言葉が出てこない。頭の中が真っ白になった。それもそうだが状況の変化にナイトの思考が追いついていない。

高くなった視点で、再度自分の周りに目をやる。中年の男が1人と、若い男が3人。合計4人の男達が倒れている。起き上がる気配は一向にない。

まさか……本当に殺したのか？

3番レジの少女の足元には、一丁のライフルが落ちている。ゲムでしか見た事がないが、きっと本物だ。

2番レジの少女は刀の切っ先を月光で光らせ、ナイトに向かって歩き出す。あれも本物だ。

本当に……。

殺されたのだ。彼女達に。そして今、まさに自分も同じ目に遭お

うとして……。そう考えただけで、膝が震えた。喉が渴いた。汗が背中を濡らし、心臓の鼓動が早くなる。

嫌だ。嫌だ！ 嫌だ……！！ 頭の中で警報が鳴り響き、恐怖で意識が遠のきそうになる。まだ死にたくはないと叫び狂う。

そう考えたとき。

「猿願時、下がれ！」

2番レジの少女が叫んでいた。

倒れていた男達の体から、黒い霧が立ち上り、それら4つの黒い霧はナイトへと吸い寄せられるように向かってきた。

「やば！ 先に浄化しとくべきだったねえ。この子の負の感情に惹かれちゃったかあ」

4つの霧は一瞬にしてナイトの右の掌に吸い込まれていく。そして、ナイトの体は急激に熱気を帯びていった。

「あ……あ……」

目の前が真っ暗になる。右手が自分の物で無くなるような……へんな感覚だ。例えるなら骨折したときにギプスを巻いた右手……。確かにここにあるはずなのに、感覚がない。

「キヤア!？」

目の前で女の子の声がした。気力を振り絞って前を見る……。する

と、砂場の上に自分を締め上げていた3番レジの少女が横たわっていた。

「バケモノめ……」

2番レジの少女が長刀を構えている。その切っ先はまぎれもなく、ナイトに向けられていた。

バケモノ？ オレが？ 朦朧とする意識の中でナイトは精一杯思考する。一体、何が起きているのか、確かめなければならぬ。

「お前は犬神 輝鈴がここで討つ」

2番レジの少女……輝鈴が動いた。輝鈴の刃が春の夜風を切り裂き、ナイトに迫る。

「おい、待てよ！ ちょっと待てて！！」

「問答無用！」

この女は本気だ。

ナイトは背筋が震え、恐怖で頭が一杯になり、思わず右腕を振り回した。ただ振り回しただけだ。それだけで、鉄がガラゴロと崩れ落ちるようなハデな音がナイトの耳をつんざいた。

気が付くと目の前にあつたはずのジャングルジムは真つ二つになつており、子供が遊ぶには難儀な状態になつてしまつていた。

ナイトの額を大粒の汗が流れる。それを右手で拭おうとした時。

バケモノと呼ばれる理由に気付いた。

銀色に輝く怪物の様な右腕。肘から先はまるで西洋甲冑のガントレットの様な鈍い銀色を放っており、先端部分には鋭く凶悪な爪が備えられている。それがジャングルジムを遊具から粗大ゴミへと変貌させたのだった。

「何だよ、これ……。オレの右手どこいったんだよ!？」

「お前は自分の獲物だ、バケモノ」

気が付くと輝鈴は滑り台の上にあった。おそらく、ナイトが右腕を振り回した時に移動したのだろう。

雲間から顔を出した月が、輝鈴の横顔を照らし出す。その横顔は美しいというよりも、恐ろしい。恐ろしいまでの無表情。いや、美しい仮面……そういう方が正しいかもしれない。

不意に、仮面の口元が僅かに歪んだ。ナイトがそれを見たのと同じ時、右から爆風が吹いた。

まるで空になった空き缶の様に、ナイトは面白いようにぐるぐると転げ回る。口内の粘膜が破れ、そこに触れるだけで痛みが走った。鉄の味を飲み込み、ナイトは立ち上がる。

滑り台の上を見ると、すでにそこに輝鈴はおらず、ナイトがさっきまで立っていた場所で左足を軸にして右足を上げていた。爆風と思っただのは彼女の蹴りだったようだ。

「何すんだよ、オレはお前らに抵抗するつもりはない。落ち着いて

話を聞いてくれ！」

ナイトの説得が通じたのか、輝鈴の足がピタリと止まる。

「オレは、桃山 ナイト。つい先週この町に越して来たばかりなんだ。なあ、何が起こってるんだ？ オレの体、どうなってるんだこれ！？」

「お前は鬼に心と体を支配されつつある。侵食が右腕から始まった……お前の右手は鬼と化している。救いを求めるならば道はただ一つ。黙ってこの刀の錆になれ」

ナイトの説得も虚しく、輝鈴の刀が鈍い銀色を放ち、その切っ先がナイトの喉元に突きつけられる。

次の瞬間、輝鈴の体がナイトの目の前で消えた。そのわずか数秒後に、ナイトは後頭部に衝撃を受け、盛大に地面とキスをする。ちなみにこれはファーストキスだ。

土や砂利と戯れながら、ナイトは頭の中で考える。

『こんなワケのわからないまま、殺されてたまるか』。『相手が女だろうと関係ない……やってやる』。

小石や砂が汗で引っ付いた顔のまま、ナイトは立ち上がる。再び迫った輝鈴に向かって右腕をハンマーの様に思いきり叩きつけた。

これは正当防衛なんだと自分に言い聞かせて。

まるで地中で地雷が爆発したかのように、公園の地面に大きな穴

が一つ空く。ジャングルジムを破壊した時もそうだったが、この右手は相当な破壊力を持っているらしい。普通の人間ならば今の攻撃で十分に戦意を削ぎ、恐怖を植えつけることが出来ただろう。

だが、輝鈴は違った。ナイトが右手を叩きつけた爆心地に、輝鈴の姿は無い。背中に受けた衝撃を体全体で感じるのと同時、輝鈴が後ろに回りこんでいた事に気付く。その表情からは、怯えや恐怖といったものは一切読み取れない。

シーソーの片側に突っ伏し、死んだようにナイトは動かない。やがて輝鈴が静かに近づき、刀をナイトの首筋に向けた時だった。

輝鈴の左足がナイトの醜い銀色の指にからまれ、瞬時に重力から開放される。

「油断しやがったな、この野郎！」

ナイトは歓喜した。そして同時に勝利を確信した。

しかし、輝鈴は空中で体を鮮やかに一回転し、見事な着地を決めて見せた。着地と同時に、再び爆竹のような音がナイトの耳をつんざいた。

「油断しちゃったねえ、桃山 ナイトくん？ サイキョーないちごちゃん、あの程度じゃくたばらないよ？」

砂場で3番レジの少女……いちごが右ひざを地面に付き、ライフルのスコープを覗き込みながらそう呟いた。

ナイトは自分の腹を見た。確かに腹部に強烈な痛みを感じるが、

出血はしていない。一体どういうカラクリなのか……だが、それをゆっくりと考えている暇はなさそうだった。

「さつてと、しーちゃん来る前にもっと弱らせとこっかぁ。きりりん、GO!」

「了解」

いちごの景気良い掛け声に輝鈴が頷き、一陣の風となってナイトとの距離を詰める。それに対応しようと右手を動かそうとするナイトに、無慈悲な銃弾の嵐が襲い掛かった。二対一。数の上でも、技量的な面でもこちらが不利。

しかし……死にたくはない。わずか15年と八ヶ月。まだまだやりたい事もある。嫌だ。

不意に右手が熱くなった。燃えるような熱さだ。気が付くと黒い霧のような物がナイトを包み込みつつあった。何故だかわからないが非常に気分がいい。

目の前の少女達に視線を向ける。刀と銃。その二つがナイトの命を狙っている。怖い……というのは、さっきまでの感情だ。今は……何故か楽しい。無性に楽しい。

恐怖がなくなると、今度は彼女達の容姿に目がいく。美少女だ。スカートの下、胸元、唇……ナイトの中で何かが弾ける。

黒い霧が再びナイトの右手に集まっていく、集まった黒い霧は銀色の右手を黒く変色させる。黒く光る右手……先ほど以上に鋭く伸びた爪は、凶悪さを一層増していた。

ナイトは笑った。紫に染まった瞳を輝かせ、全身にまとった黒い霧を引きつれ、欲望に従うがまま少女達に襲い掛かる。先ほど目撃した中年男性のように。



## 紫の瞳

「こいつ……」

輝鈴の無表情だった顔が、わずかではあるが焦りを見せた。だがそれはあくまで一瞬のこと。輝鈴は夜空を舞い、空中からナイトの右手へと斬撃を見舞う。

しかし、輝鈴の刀は盛大に空を斬った。すでにそこにナイトの姿はない。すぐさま気配を追うと、滑り台の上にナイトが立っていた。

立場の逆転。

夜の月が、ナイトの背後に浮ぶ。月光を背に受け、ナイトの顔は影になった。前身を黒い霧に覆われているので、必然的にそこに映るのは、らんらんと輝く二つの紫炎……狂気を受け、鬼と化したナイトの瞳であった。

ナイトは再び笑った。輝鈴がそれを見たのと同じ、右から爆風が吹いた。

まるで中身をすべてぶちまけたペットボトルの様に、輝鈴はころころと転がった。かわいらしいピンクの制服やスカートは所々破れ、刺激的すぎる。だがそれに構うことなく、輝鈴は立ち上がった。

滑り台の上を見ると、すでにそこにナイトはいない。輝鈴がさっきまで立っていた場所で左の人差し指を輝鈴の方に向けていた。爆風と思ったのは彼の人差し指……。

ナイトの右手が再度、輝鈴に迫る。黒い塊であるそれは、輝鈴の振りぬいた刀を簡単に受け止める。銀色の刃を右の掌で受け止め、ナイトは唇を歪ませた。そして、右手に軽く握力を加える。

まるで棒アイスを割るように、刀をパリンと砕き割った。

「霊刀が……」

無表情だった輝鈴が明らかにうろたえていた。視線は申し訳程度に柄にくっ付いた刃に注がれており、放心状態である。周囲の音すら耳に届いていない。いちごの叫び声も、ナイトの右手が空を切る音も。

ナイトはまたも笑う。さっきまで、まるでテレポーターションしたかのように速く動いていた輝鈴の動きが止まっている。いや、遅すぎるのだ。遅く見えた。

ナイトの右手が輝鈴の腹部に迫る。その右手は輝鈴を貫く寸前、いちごの放った銃弾で弾かれ、軌道を大きく変更し外灯をへし折った。

「きりりん、本日二度目の精肉コーナー行きよ？ こいつは引き受けるから、さっさとしーちゃん呼んできて！ ……通常の3倍の速さだね」

ナイトの視線は目の前の輝鈴から、砂場のいちごへと変わる。いちごと目が合う。目が合ったとたん、いちごは一步後ずさった。

「ちよ！ いいカンジに鬼ってんじゃない。まずいですよ、これはあ」

いちごが息を飲み再びスコープを覗き込むと、そこに映ったのは紫の瞳だった。

ナイトの右手がライフルを弾く。丸腰になったいちごは、離脱を試みようとして視線をさまよわせた。

その時だ。ナイトの足元に6本のシャーペンが突き刺さった。それら6本のシャーペンには、形や大きさがばらばらのノートの切れ端が紐でくくりつけられている。

6本のシャーペンは眩しく発光し、ナイトの足元に幾何学的な紋様を描く。途端に、ナイトの全身を激痛が走った。

頭が割れるように痛い、膝を付き、頭を抱えるようにしてその場でうずくまった。痛みを喘ぎながら体をのたうつ。

右手から黒い霧が立ち上り、それが春の夜空へと消えて行った。すると、ナイトの右手は元に戻り体中を覆っていた黒い霧も晴れ、元の姿へと戻った。

「お前ら、こんなモブに何手こずってやがる。俺の手を煩わせんなつての、おちおちゲームもできねーだろが」

「しーちゃん、遅いい〜」

折れた外灯の側に、一人の少女がいた。それは、5番レジにいた『木地 雫』という少女であった。

「すまん、木地……油断していた。まさか、一般人が近くにいると

は思わなかったんだ」

「ドアホが！ 結界張り忘れた上に、霊刀ぶっ壊しやがって！ その上、一般人に狩りを見られたあげく、鬼化……店長に報告すんの誰だと思っただ」

「すまん……かくなる上は、自分の首を差し出して」

「いるか！ そんなモン！」

「まーまー、しーちゃん、落ち着いてっば！ きりりんだってまだ初心者さんなんだしさ。多めに見てあげてよ！ それより、この子……どうするの？ 鬼化は止まったみたいだけど……」

いちごがナイトをちらりと見て、雫に指示を仰ぐ。

「そうだな……これだけハデにやらかしてくれたんだ。後でたつぷり礼をしてやるとして……いや、待てよ。鬼化したとはいえ力を制御出来ていた……使えるぞ、こいつ」

「えええ！？ ちょっと待って、この子、ウチで雇うの！？」

「ああ、それにホラ。見るよこれ。本人も元々ヤル気だったみたいだぜ？」

雫は公園の入り口に落ちていた、スーパーユメヒコの袋の中に入っていた求人広告を取り出し、他の二人に見せた。

「雇ってやるうじゃないか、ウチで。これだけ楽しくて楽チンなバイトは他にねーからな」

幼い顔を妖しく歪ませ、雫は求人広告を握りつぶした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0243ba/>

---

時給700円の鬼狩者

2012年1月6日19時47分発行